

第五章

結論

A. 第一、『みんなの日本語』第 20 課から第 40 課及び第 41 課から第 50 課における相づち、第二、2 年生と 3 年生が打った相づち、第三、性別により男女の 2 年生と 3 年生が打った相づちの研究成果

本研究には記述方法に基づき記述した。その結果、第一、『みんなの日本語』第 20 課から第 40 課までと第 41 課から第 50 課における相づちは両方では冒頭相づちしか使っていない。一方、途中相づちは全然使っていないと分かった。2 年生と 3 年生の被験者は途中相づちより冒頭相づちのほうが多く使用したが、この原因はおそらくインドネシアの言語行動に影響を受けているだろう。インドネシア人が相互コミュニケーションをしているとき、相手は話してが話していることをうなずき、短い音声のような相づちであったが、それほどそんなに多く使用しなかった。それは冒頭相づちを多く使い、話しの途中で話しが急に切れたら、話し手に失礼だと思っているからだ。

『みんなの日本語』第 20 課から第 40 課と、第 41 課から第 50 課までの教材における相づちの種類を見ると、両方とも「短い音声」、「広義相づち」と「相づち+A」という 3 つ相づちの種類を使っている。

さらに、相づちの機能を分析した。『みんなの日本語』第 20 課から第 40 課までの教材では、8 つの相づちが見られた。その会話と練習 C では

一番多く使っている相づちの機能は「①確認、②同意、③終了、④感想、⑤継続、⑥承認、⑦否定・陳謝、⑧共感」の順番であった。一方、『みんなの日本語』第 41 課から第 50 課までの教材では、7つの相づちが見られた。その会話と練習 C では一番多く使っている相づちの機能は「①確認、②感想、③同意、④継続、⑤否定・陳謝、⑥共感、⑦終了」の順番であった。

第二の質問、「2 年生と 3 年生が打った相づち」では相づち回数、種類と機能について、次のように言える。

1. 相づちが打った回数の場合には 2 年生より 3 年生のほうが一番多く使用した。
2. 相づちの種類と機能

2 年生と 3 年生の両方とも、冒頭相づちと途中相づちを使っている。しかし、両方は途中相づちの回数より冒頭相づちの回数のほうが多く使われている。その結果と日本人の被験者と比べると、日本人の被験者は冒頭相づちと途中相づちも使っているけれども、途中相づちの回数は「2 年生と 3 年生が打った途中相づち」より、非常に多く打っていた。

「2 年生と 3 年生」と日本人の被験者は「短い相づち」、「広義相づち」、「相づち+A」の相づちの三種類を使っていた。「2 年生、3 年生」、日本人、『みんなの日本語』第 20 課から第 40 課までと、第 41 課から第 50 課までの 3 つの変数を相互に比べると、相づちが打った回

数により、相づちの種類は「①短い音声、②相づち+A、③広義相づち」の多い順番であった。

さらに、相づちの機能については、「2年生と3年生の被験者が打った相づち」を下記のように言える。

a. 2年生の被験者は相づちの機能について、「①確認、②同意、③感想、④継続、⑤否定、⑥共感、⑦終了、⑧承認、⑨感情」の多い順番であった。

b. 3年生の相づち機能は「①同意、②確認、③継続、④共感、⑤感想、⑥否定・陳謝、⑦終了、⑧感情」の多い順番であった。この場合は、『みんなの日本語』第41課から第50課までに、3年生の被験者の「承認」の相づち機能が見られなかった。第41課から第50課までに、⑧感情の相づち機能が見られなかったが、3年生は1回しか使っていなかった。

又、3年生は①同意と②確認の相づち機能を多く使っていたが、『みんなの日本語』第41課から第50課までの教材における①確認と②感想の相づち機能を多く使っていた。つまり、この場合に、『みんなの日本語』第41課から第50課までと3年生、両方が「確認」の相づち機能はよく使っていた。その一方、3年生は①同意、⑥否定・陳謝、⑦終了、④共感の相づち機能をよく使っていたが、『みんなの日本語』第41課から第50課までの教材におけるそれらの相づち機能があまり使っていなかった。

⑤継続の相づちの場合は、『みんなの日本語』第20から第50課までの教材における多い順位にはならない。一方、日本人の被験者が使っ

た「継続」の相づち機能と比べると、この機能が非常に優先順位になれていたのを見られた。第一順位であり、第二、第三順位は「同意」と「確認」であった。

上記に述べた結果に基づき、『みんなの日本語』第 20 課から第 50 課までの教材は日本人言語の行動とコミュニケーションストラテジーに関連する相づちが非常に不足していると思っている。

- b. 2 年生と 3 年生は相づちの種類が使えたが相づちの機能の場合、「ああ（系）」「う~ん」「へえ」というような感嘆の相づちと、「ああ、そうですか（系）」の感嘆の疑問がかなり間違いやすいと見られる。相づちの機能を理解していない 2 年生と 3 年生はこのことを誤用すると思われる。
- c. 「2 年生と 3 年生」は『みんなの日本語』第 20 課から第 50 課までの教材における相づちの種類が使えるだけではなく、また「うん」、「そうそう」、「はいはい」「そうか」などの色々は相づち種類が使えているということが分かった。ただ、学習者はそれらの機能をまだ理解していないということも分かった。

最後、ジェンダーについて、男女の 2 年生と 3 年生の被験者が打った相づちを次のように言える。

- a. 女性の 2 年生と 3 年生も女性の日本人も打った相づちの回数が多く見られる。又、男性の 2 年生と 3 年生と男性の日本人より「冒頭相づち」と「途中相づち」が多く見られる。

- b. 女性の2年生と3年生は男性の2年生と3年生より短い音声の回数が多く見られる。又、女性の2年生と3年生は「支持の相づち」、「感嘆の相づち」、「感嘆＋支持の相づち」、「感嘆の疑問」の相づちが使われている。

男性の2年生と3年生は「聞き返し」の「広義の相づち」をよく使っている。一方、女性の2年生は「繰り返し」の「広義の相づち」をよく使っている。又、「広義相づち」の場合は、女性の日本人が「聞き返し」の「広義相づち」をよく使っている。一方、男性の日本人が「繰り返し」の「広義相づち」を一番よく使っている。それにも関わらず、両方の女性は両方の男性より「文の完結」の「広義の相づち」を多く使っている。

- c. 相づちの機能を見ると、両方の女性は両方の男性より様々な相づちの機能を使っている。女性の日本人の被験者は「①確認、②同意、③継続、④終了、⑤否定・陳謝、⑥感想、⑦共感」と言う7つの相づちの機能を使っている。又、男性の学習者の被験者は「①確認、②同意、③継続、④終了、⑤否定・陳謝、⑥感想、⑦共感、⑧承認」という8つの相づちの機能を使っている。

男性の日本人は「①確認、②同意、③継続、④終了、⑤共感、⑥承認」と言う6つの相づちの機能を使っている。女性の日本人は「①確認、②同意、③継続、④否定・陳謝、⑤終了、⑥感想」と言う6つの相づちの機能を使っている。この場合には、「確認」の相づち機能の順で多く

使っている。次は、「同意」、「継続」という相づち機能も多く使っている。

B. 提案

本研究には、いくつかの不十分な点がある。本研究には、当初 45 組すなわち 90 名を使用する計画であったが、実際は計画より少なく、被験者として 2 年生及び 3 年生の総計 30 組すなわち 60 名を使用した。又、本研究には学生同士及び日本人同士が会話のロールプレイを焦点している。だから、将来には相づちの研究に関連し、学生が日本人と会話のロールプレイに焦点が合えると思っている。

本研究には、イントネーション及びタイミングに関する相づちの研究を対象としていないが、日本語の学習者がイントネーション及びタイミングに関する相づちを研究する必要があると考えている。被験者として、日本人の 3 組すなわち 6 名しか使用しなかった。マカッサルに滞在している日本人が少ないからである。又、女性と男性を比べると、人数について女性のほうが多くなってしまった。さらに、性別に関連するデータはとてもなく、将来もっと良い研究になるためには、被験者としてバランス取れた男女の人数が必要と考えている。